

Title	カリキュラム・コーディネータ養成のための e-Learning プログラムの開発研究
Author	木原, 俊行 / 堀田, 龍也 / 山内, 祐平 / 小柳, 和喜雄
Citation	教育学論集. 31 卷, p.1-10.
Issue Date	2005-09
ISSN	0288-4909
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科人間行動学専攻・教育学専修
Description	

Placed on: 大阪市立大学学術機関リポジトリ

Placed on: Osaka City University Repository

カリキュラム・コーディネータ養成のための e-Learning プログラムの開発研究

Development of an e-Learning Program for Curriculum Coordinators

木原 俊行*1 堀田 龍也*2 山内 祐平*3 小柳 和喜雄*4
Toshiyuki KIHARA Tatsuya HORITA Yuhei YAMAUCHI Wakio OYANAGI

大阪市立大学・大学院文学研究科*1

GRADUATE SCHOOL OF LITERATURE & HUMAN SCIENCES, OSAKA CITY UNIVERSITY

静岡大学・情報学部*2

FACULTY OF INFORMATION, SHIZUOKA UNIVERSITY

東京大学大学院・情報学環*3

INTERFACULTY INITIATIVE IN INFORMATION STUDIES, GRADUATE SCHOOL OF THE
UNIVERSITY OF TOKYO

奈良教育大学・教育学部*4

FACULTY OF EDUCATION, NARA UNIVERSITY OF EDUCATION

概 要

「総合的な学習の時間」など、学校を基盤とするカリキュラム開発においては、教師間の共同が促進されなければならない。そのためには、ミドルリーダーたる「カリキュラム・コーディネータ」が果たす役割が重要である。本研究では、彼らの力量形成、とりわけカリキュラム開発におけるコーディネーションに必要とされる知識の獲得を目指した e-Learning プログラムを開発し、評価した。この教員研修プログラムでは、異なる地域の 8 名の教師が、電子掲示板やテレビ会議システムを用いて、カリキュラム開発の動向を分析したり、事例研究を展開したりする。また、それを、総合的な学習のカリキュラム開発経験が豊富な教師等（ファシリテータ）が支援する。

プログラム終了後のアンケート調査や事前・事後テストの結果、参加者はいずれも、カリキュラム開発に関わる多様で複雑な知識を充実させたことが明らかになった。また、プログラムデザイン、ことに研修内容の妥当性、テレビ会議システムの利用可能性と課題等が示唆された。

キーワード：カリキュラム・コーディネータ, e-Learning, 教師教育, 学校を基盤とするカリキュラム開発, 総合的な学習の時間

1. 問題と目的

時代や社会の変化は、教師の力量について、その再構築を要請する。今日の教育改革は、教師に、その役割の刷新を迫るとともに、新しい教師像さえ期待している。例えば、今日の学校における学びの組織化や学校評価への対応という観点から、学校に「学習コーディネータ」を置くことが重要であるという指摘がある(小島 2003, p.162)。それは、教務主任、生徒指導主任、進路指導主任などの機能を併せもち、学校教育活動を推進する核となる組織や個人として、イメージされている。

ところで、我が国の教育改革の動向の柱のひとつとして、「総合的な学習の時間」の創設など、学校を基盤とするカリキュラム開発の拡充があげられよう。そして、この営みには、カリキュラムについて専門的知識をもつ教員、すなわち「教育課程経営のスペシャリスト」が必要であると主張されている(小島 2003, p.148)。本研究の対象たる「カリキュラム・コーディネータ」も、「学習コーディネータ」の1形態であり、今後、その機能が重視されると思われる、学校組織のミドルリーダーである。

木原(2001)は、「総合的な学習の時間」などの学校を基盤とするカリキュラム開発においては教師たちの「共同的意思決定」が必要とされること、そしてその営みは、問題の共有、葛藤、妥協、問題解決という極めて複雑な過程を経るものであることを実証している。カリキュラム・コーディネータは、そうした共同的意思決定に際して、調整者という重要な役割を果たすことになる。

しかし、一般に教師文化において、共同の成立は簡単ではない(Hargreaves 1994, 秋田 1998 など)。ことにカリキュラム・コーディネータは、その立場の複雑さゆえに、極めて深刻な葛藤状況に遭遇することが予想される、実際、それは、木原(2003)において指摘されている。木原(2003)は学校を基盤とするカリキュラムの開発と運用において中心的な役割を果たすカ

リキュラム・コーディネータが抱く葛藤の特徴について、その記述を試みている。ある小学校において4つの学年の「総合的な学習の時間」の指導に従事する教師にインタビュー調査を実施し、その教師が抱く葛藤には、1) 授業設計時に特に出現しやすい、2) カリキュラム開発が複数年に及ぶため、長期的ビジョンに基づく意思決定が必要となる、3) 学校組織を見渡しながらも、個々の教師が置かれた状況に配慮しなければならないため、多元性を持つといった特徴があることを明らかにしている。

カリキュラム・コーディネータがこうした葛藤を克服するためには、1) カリキュラム開発に関わる多様な、そして相互に関連する知識、2) コーディネーション方策が彼らに必要となる(図1)。そのため、既に我が国でも、いくつかの地域の教育センター等では、行政研修の一環として、カリキュラム・コーディネータ研修が催され、そこで、各学校の研究主任等がカリキュラム開発に関する基礎理論を学んだり、実践情報を交換したりしてはいる。しかしながら、それらの機会は限られているため、十分な効果が得られていないのが現状である。

コーディネーション
のための知識

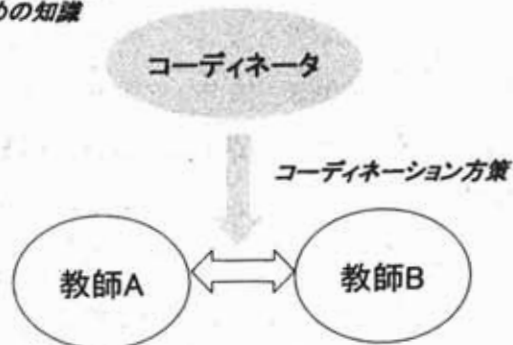


図1 カリキュラム・コーディネーションの構造

そこで本研究では、カリキュラム・コーディネータの力量形成を目的とする教員研修を Web ベースの e-Learning で展開し、そのデザインと効果を検証することを試みる。なぜならば、カリキュラム・コーディネータを目指す教師たち

に、カリキュラム開発におけるリーダーシップを獲得する機会を提供するためには、彼らが同じ立場にある教師たちと意見や情報を密に交換できる環境や、カリキュラム・コーディネータとしての経験が豊富な教師から彼らが知識等を吸収するための舞台を整える必要があり、それは、現状では、Web ベースの研修でしか実現しないからである。

なお、Web を基盤とした現職教育は、既に多様な営みが試みられてはいる。それらに比べて、本研究は、対象者をミドルリーダーたるカリキュラム・コーディネータに定めている、それゆえ研修内容を学校のカリキュラム開発に関わる知識や方策に焦点化している、また、それが高度なものであるため、事例研究とそれにもとづく深い議論を研修課題の支柱に据えている、さらには研修のねらいを実現するために、プログラムの運用に Blended Learning (集合研修、電子掲示板、テレビ会議システム等の連携) やファシリテータを導入しているといった点を特色としている。

2. 研修プログラムの枠組み

筆者らは、上記のような目的、特徴を有した Web ベースの教員研修プログラムを、eCC プロジェクト (e-learning project for Curriculum Coordinator) と呼び、それを次のような枠組みで計画・実施した。

2.1 目的

前述したように、本研究では、カリキュラム・コーディネータがその役割を遂行するために有すべき資質を 1) 多様な、そして相互に関連する知識と 2) コミュニケーション方策と定義しているが、今回開発した研修プログラムでは、前者に限定して、参加者にそれを獲得してもらうことを目的とした。

個々の教師の思いやこだわり
(実践的知識)

教育課程行政の
動向(指導要領、
中教審などの一
般的知識)

カリキュラム研究の
知見(学術的知識)

要因間の葛藤
(メタ知識)

学校の文化・
実践史等

子どもの実態

図2 カリキュラム開発に関わる知識体系(目標)

カリキュラム開発に関わる知識として、本研修プログラムでは、大別して3つのものを想定した(図2)。1つは、教育課程の基準の改善や学習指導要領の改定などの動向に関するもの(一般的知識)とカリキュラム研究の知見(学術的知識)である。

2つは、所属している学校の地域性や実践史など、カリキュラム開発上必要とされる、個別的具体的知識である(実践的知識)。

そして、3つは、前記の知識間の関連、例えば一般的知識と個別的知識のズレといった知識である(メタ知識)。

2.2 参加者等

全国各地の中堅～ベテラン(教職経験14年～26年目)の小学校教員8名に、eCCプロジェクトによる研修に参加してもらった(表1)。

また、研修活動のファシリテータとして、「総合的な学習の時間」の専科的な役割を果たした経験のある人材2名(MY及びTT)に、プロジェクトに参画してもらった。1名はK大学附属小学校の教諭であり、もう1名はO県教育委員会の指導主事である。

なお、筆者ら研究者4名は、カリキュラム開発や授業研究、学習環境論を専門としており、コーディネータとして、プロジェクトの企画・運営に責任を負った。例えば、後述する研修課題については、ファシリテータと相談しながらではあるが、コーディネータがそれを定めた。

表1 eCCプロジェクト参加者

イニシャル	NF	YK	OM	KM	MK	FT	HF	TK
性	女性	女性	男性	女性	男性	男性	女性	男性
地域	千葉県	静岡県	静岡県	富山県	奈良県	兵庫県	徳島県	熊本県
教職経験	26年目	14年目	21年目	19年目	26年目	21年目	20年目	16年目
担当学年等	6年生	総合担当	4年生	2年生	理科担当	5年生	3年生	5年生
校務分掌	研究主任 学年主任 コンピュータ主任 総合主任	研修主任 総合主任 情報教育主任	情報教育主任	情報教育主任 防災安全指導	教務主任	総合社会評価	情報教育主任 理科主任 研修副主任	地域研究会の研究主任

2.3 運用システム

研修プログラムは、図3のようなシステムで運用される。すなわちコーディネータが課題を提示し、それに対するレポートを、参加者が、Web上で資料を収集しながら作成する。そして、作成したレポートをファイルキャビネットにアップロードし、集合研修又はテレビ会議システムを利用して、相互評価する。

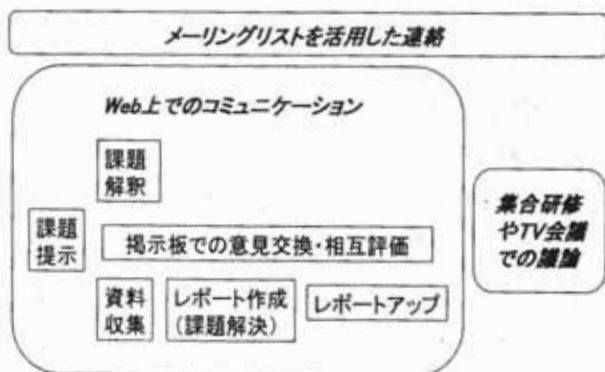
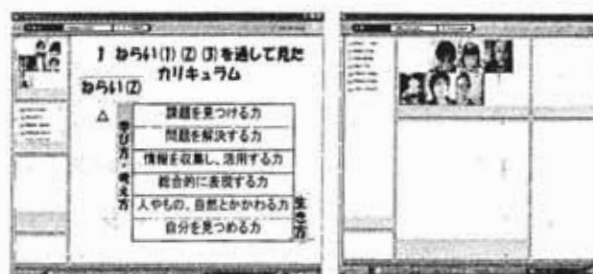


図3 各課題に対する解決活動

参加者は、課題解釈から、相互評価まで、電子掲示板での議論を繰り返すが、それをファシリテータが支援する。また、最終レポートは、集合研修またはテレビ会議システムにおいてプレゼンテーションされ、それをもとに、参加者間、参加者とファシリテータ間で議論が繰り返される(図4)。



プレゼンテーションモード ディスカッションモード

図4 テレビ会議の様相

2.4 課題と実施時期

研修プログラムは、次のように、カリキュラム開発に関わる知識群を反映した、3つの課題により構成され、2004年7月から12月に実施された。課題提示から相互評価まで、各課題に約2月が費やされる。

第1課題：S 学校の総合的な学習プランについて、その長短所を整理しなさい。(一般的知識、学術的知識)(7, 8月)

第2課題：所属校の総合的な学習のカリキュラムの特徴をグループの他のメンバーにプレゼンテーションしなさい。(実践的知識)(9, 10月)

第3課題：T 小学校のカリキュラム開発記録を読んで、その問題点を克服するためのアクションプランを策定しなさい。(知識間の関連=メタ知識)(11, 12月)

2.5 ファシリテータの役割

2名のファシリテータには、次のような役割を果たし、参加者の知識獲得を支援することを依頼した。

- ・課題解釈及び資料収集の案内役
- ・電子掲示板やテレビ会議での相互評価に対するコミュニケーション調整役
- ・レポートや発言に対する批判的コメント提供役

批判的コメントの提供については、課題ごとにレポートの評価の観点と規準をコーディネータが作成して、それをファシリテータに示した。そして彼らには、参加者に対して、電子掲示板上で、また対面あるいはテレビ会議上で、評価規準を参照しながらコメントを投げかけてもらった。¹

2.6 課題に対するレポートや意見を評価する規準

それぞれの課題に対するレポートを評価するための規準をコーディネータが用意し、ファシリテータに提供した。彼らは、それらを踏まえて、参加者が作成するレポートや彼らの意見に対してコメント等を投げかけた。

(1) 第1課題のレポートを評価する規準

レポートにおいて、S学校の総合的な学習プランの長短所をまとめる際に、次のような視点(知識)を、その「根拠」として活用している。

1) 「総合的な学習の時間」創設の趣旨=学習指導要領の総則(その一部改正も踏まえて)

(一般的知識)

2) カリキュラム開発の古典的要素やカリキュラムの古典的類型、カリキュラム評価の重要性など、カリキュラム開発研究の知見(学術的知識)(安彦 2003)

(2) 第2課題のレポートを評価する規準

所属校の所属校の総合的な学習のカリキュラムの特徴をプレゼンテーションする際に、第1課題で獲得した、「総合的な学習の時間」創設

の趣旨=学習指導要領の総則、カリキュラム開発研究の知見を「その根拠として」活用している(一般的知識及び学術的知識の定着)。

また、所属校の総合的な学習のカリキュラムの特徴が、総花的にはなく、「焦点化されて」示されている。「自分なりの言葉で、しかも他者に了解可能な用語で」表現されている。「図表等を用いてモデル的に」総括されている(実践的知識)。

(3) 第3課題のレポートを評価する観点と規準

プランにおいて設計されている方策が、課題1で獲得した一般的・学術的知識、課題2で検討した実践的知識(課題3の場合、条件文に記されたT小学校のもの)を踏まえたり、活かしたりするものとなっている(一般的知識及び学術的知識の定着)。

同時に、アクションを起こす場面が、年間を通じて、また多様な機会を念頭に置いて、構想されている。また、教師たちの立場や経験等の違いに配慮して、それに応じた個別的な対応を構想している(メタ知識)。

3. 研修プログラムの評価

3.1 参加者に対するアンケート調査の結果から

プログラム終了後に、参加者に対して、電子メールを活用して、アンケート調査を実施した。それらは、1) レポート作成、2) レポート作成前後での電子掲示板での議論、そして3) テレビ会議におけるプレゼンテーションや他者に対するコメントについて、自らの取り組みを自己評価してもらうものである。

(1) レポート作成

8名の参加者中、6名が、レポートの提出が定められた期限に間に合わなかったことを反省している。HFが「(課題)内容が難しかった」と述べていることに代表されるが、8名の中堅

教員にとっても、3つの課題は難易度が高いものであったようだ。ただし、そうした課題への挑戦は、「法的根拠などを意識するようになった」(YK)、「見方が広がった」(KM)といった効果をもたらしてもいる。このような知識獲得の実現について言及している者が、参加者8名中4名を数えた。

(2) レポート作成前後での電子掲示板での議論

参加者8名中6名が、参加の積極性が足らなかったと自らの取り組みを回顧している。「文字で伝えることは難しい」(YK)といったことがその原因であると思われる。

しかしながら、「他校の取り組みを知り、自校の問題点分かった」(KM)、「書き込むことで自分の考えが明らかになると感じた」(FT)といったコメントも寄せられており、電子掲示板でのコミュニケーションが知識獲得に資するものであったことも確認された(8名中4名)。

同時に、議論におけるファシリテータの働きについては、8名中5名がその意義、効果について言及しており、彼らが期待した役割を果たしたことが明らかになった。

(3) テレビ会議におけるプレゼンテーションや他者に対するコメント

テレビ会議システムの活用については、「遠隔地の先生方と親近感を持って話し合えた」(NF)といった肯定的な評価が下される一方で、「聞き手の反応を見ながら伝えることが難しいので、やや一方通行のように感じた」(FT)と、その問題点を指摘するコメントも登場してきた。

以上のような回答結果から、研修プログラムの枠組みが、基本的には参加者に肯定的に受け止められていることが確認された。

さらに、プロジェクト終了後に実施したアンケートでは、参加者に対して、「他校で総合的な学習の時間のカリキュラム開発のリーダーとなっている教師に、eCCプロジェクトあるいは同

様の取り組みへの参加を勧めるための案内文を作成してください。」と要請し、彼らが作成した案内文に、eCCプロジェクトの特徴が盛り込まれているかを確認した。それらは、1) 学校を基盤とするカリキュラム開発や学校の全体計画の重要性(プロジェクトの前提)、2) コーディネータとしての力量形成(プロジェクトの目的)、3) e-Learning(プロジェクトの様式)、4) ファシリテータやコーディネータによる支援(プロジェクトの様式)である。

例えば、KMは、次のような案内文を作成しているが、その内容は、上記4つの特徴を網羅していると言える(下線及び括弧内は筆者らによる)。

総合的な学習のカリキュラム・コーディネータの力をさらに伸ばすプロジェクトにいっしょに参加してみませんか。

わたしは日々総合的な学習を実践しながら、子供たちに学び方や生き方を含め豊かな学力を本当に育てているのだろうか、カリキュラムの見直しは必要ないだろうかと多々悩むことがあります(学校を基盤とするカリキュラム開発の重要性)。

紹介するプロジェクトは、悩みを共有しながら、自校の取り組みのよさや問題点を明らかにしつつ、リーダーとしての資質、カリキュラム開発の研修計画・運用について学んでいけます(コーディネータとしての力量形成)。

プロジェクトのうりは、リーダーとしての資質向上はもちろんのこと、

- ・ 自宅で自由な時間にネットで研修できる(e-Learning)。

- ・ 内容を深めてくださる有識者を交えて議論できる(ファシリテータやコーディネータによる支援)

- ・ 時にはTV会議で相手の顔を見ながら、時には掲示板に書き込みながら意見交換ができる

- ・ オフラインで飲みニケーションする、おもしろい人に会える

などです。

いっしょにプロジェクトに参加してみませんか。

表2 eCC プロジェクト事後アンケート（案内文作成課題）結果

プロジェクトの特徴（キーワード）	NF	YK	OM	KM	MK	FT	HF	TK
学校を基盤とするカリキュラム開発、学校の全体計画の重要性	○	○	○	○	○	○	△	
コーディネータとしての力量形成	○	○	○	○	△	○	△	○
e-Learning	○			○	○	○		
ファシリテータやコーディネータによる支援	○		○	○				△

○=キーワードを正しく用いている

△=キーワードは活用されているが説明不足、あるいは必ずしも正しいとは言えない活用

8名の参加者全員の回答を分析してみると、表2の結果となった。表2から、彼らが、本研究プロジェクトの特徴、その前提・目標についてほぼ理解していたことが分かる。一方、プロジェクトの様式については、参加者の印象はそれほど強くはない。

3.2 ファシリテータに対するアンケート調査の結果から

プログラム終了後に、ファシリテータに対しても、アンケート調査を実施した。それらは、1) レポート作成に対するアドバイス（課題解釈及び資料収集など）、2) 電子掲示板やテレビ会議における司会や議論の調整、3) 電子掲示板やテレビ会議におけるレポートや意見に対する（先達としての）批評について、自らの取り組みを自己評価してもらうものである。

(1) レポート作成に対するアドバイス

2名のファシリテータともに、この点に関する自己評価は、やや否定的である。MYは、「(前略)——課題が出された後に、まずメンバーに短く意見を述べてもらえば、それに対するアドバイスができたと思います。」と回顧し、アドバイスのための布石の重要性を指摘している。また、TTは、「まず、答えにつながるコメントやヒントを書き過ぎてしまう傾向があったように

思う。特に初めの頃は、掲示板での書き込みを活発化するために、そうなってしまったように思う。次に、レポートの評価規準を踏まえて、各教師に課題解決の視点を与えるコメントを書こうと意識していたが、議論が一部の内容に偏ってしまい、全ての評価規準について話題にすることができない場合も多かった——(後略)」と述べており、アドバイスの絶対量、評価規準との兼ね合いなどの点から、その難しさを回顧している。

(2) 電子掲示板やテレビ会議における司会や議論の調整

電子掲示板における司会や議論の調整については、例えば、MYが「レポート作成前は、あまり書き込みも増えませんでしたし、私もどのように調整すればいいのか正直悩みました。しかし、レポート作成後やテレビ会議後の議論ではけっこうたくさん意見が出されるようになりました。」と回顧するように、2名のファシリテータは、筆者らコーディネータが期待した役割を十分に果たしている。

一方、テレビ会議におけるそれについては、両名の自己評価はやや異なっている。MYは、「司会や議論の調整は、かなりうまく運べたと思います。テレビ会議でも、ここまでやりとりができるのだなと実感しました。」と述べているのに

対して、TT が、「時間の制約を気にしすぎて、自由な議論の場を設定することができなかった（例えば、プレゼンをもとに、ポイントを絞って自由に意見を交わす場を作るなど）。それがとても残念。時間調整のまずさがあった。また、一問一答形式になりがちなの私の投げかけのまずさがあった。」と反省の弁を述べているからである。

TT に比べて、MY は、テレビ会議システムを活用した実践の経験が豊富である。そうした差異が、両名の自己評価の違いをもたらしていると推測される。

(3) 電子掲示板やテレビ会議におけるレポートや意見に対する批評

2名のファシリテータはいずれも、「どこまで意見をいえばいいのかが迷いました。『先達』といっても、力量に大きな違いがあるわけではないと思っていますので。」(MY) といったコメン

トを残している。しかし、「自分が経験してきたことや学んできたことをもとに、発言することはできたように思う。」(TT) といった叙述からすれば、彼らはファシリテータとしての批評役をある程度は果たすことができたと解釈できよう。

3.3 事前・事後テストの結果から

参加者8名に対して、研修プログラムの前後に、「所属校の本年度の『総合的な学習の時間』の問題点(改善すべき点)を整理してください。また、なぜそれを『問題』であると考えたのか、その理由を述べてください。」という課題を与え、それに自由記述形式で解答してもらった。彼らの問題点の指摘、その理由の叙述に、カリキュラム開発に関わる知識(一般的・学術的・実践的・メタ知識)が適用されているかどうかを整理したものが表3である。

例えば、HFの所属校のカリキュラムの叙述は

表3 eCCプロジェクト事前・事後調査結果比較

カリキュラム開発に関わる知識	NF		YK		OM		KM		MK		FT		HF		TK	
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
規制緩和																
学力観		○		○		○					○	○		○		
全体計画	○	◎		◎		○	○	◎		○	◎	◎		○	○	○
教科との関係				◎		○		○			○	○		○		○
現代的課題																
開発の3要素			○											◎		
カリキュラムの多様性				○								○				
カリキュラムの発展						◎	○	○		○				○		
カリキュラム評価			○	○				○			◎	◎	○	○		○
教師間の共同		○	○	○	○	○	○	◎		○		○			○	○
学校の実践史											○	○		◎		
学校の地域性					○	○							○			
知識間の葛藤			○		○		○				○		○			

○=言及している

◎=複数言及している

研修プログラム前後で、次のように変化している（下線部は、知識が適用されていると考えられる表現である。また、括弧内は、それが表3のどの知識カテゴリと対応しているかについて筆者らが判断した結果を示している。）。

事前：

（前略）問題点は、年間計画にそって活動した結果、どのような力が子どもたちに付いたか、また、どのような点で課題が残ったかを検討（カリキュラム評価）することだと思えます。――

（中略）――しかし、今年もその後の活動が、十分な話し合いのないまま予定通りに進行しています。それは、地域の公共施設見学です。本校校区は、もともとK小学校校区だったのですが、児童数が多いため、北と南に学校が分かれました。南は新設校です。しかし、地域には、「K地区はひとつ」という考えがあるため、北の校区にある公共施設を見学に行くことになっていきます（学校の地域性）。――（後略）

事後：

本校の総合的な学習の時間のカリキュラムは、その開発が行われてから、ほぼ5年間、固定化されている（学校の実践史）。カリキュラム開発にあたっては、先進校の取り組みを参考にすることでなく、学習指導要領に例示された内容について網羅するもので、子どもたちに様々な体験をさせることにより、生きる力を育みたいという願いのもとに考えられたものである。また、平成11年度には、保護者、子どもを対象に実態調査を行い、付きたい力についての検討も行われている（学校の実践史、カリキュラム評価）。しかし、人事異動があり、カリキュラム開発当時とは、温度差があることも否めない（教師間の共同）。カリキュラムが固定していることは、年度が替わり、職員組織が替わっても同じ内容でカリキュラムを実践することができるという長所がある。しかし、内容の見直しが年度当初、もしくは前年度末に十分話し合わなければ、問題点があったとしても改善されないままにな

る（開発の3要素、カリキュラムの発展、知識間の葛藤）。

本校では、子どもに付きたい力として、4つの力を設定している。――（中略）――しかし、「生き方」を考えるのは、本当に6年生だけでいいのだろうか、学年毎に、「生き方」について考えることができるのではないだろうか。学んだことをもとに、「生き方」について考えることは、可能なのではないだろうか（学力観、全体計画）。

各学年のテーマは、3年「地域」、4年「人（福祉）」、5年「自然」、6年「生き方」となっているが、このテーマに沿った内容が、子どもの実態と結びついた願いとなっているかどうかということである（開発の3要素）。3年生であれば、「地域」というテーマに沿って、1学期は、地域探検を行い、「地域のふれあいマップ」を作成することによって、地域と自分とのかかわりを深めるように計画されている。しかし、この内容は、社会科と似通っていて、どこまでが教科で付ける力なのか、総合では何をねらいとするのかが分かりにくいと思われた（教科との関連）。そこで、カリキュラム全体を見直すことが必要なのではないかと考える。

HF以外の7名も含めて、参加者全員が研修プログラム実施前に比べて、実施後に、カリキュラム開発に関わる多様な知識を所属校のカリキュラムについて語る際に適用できるようになっている。すなわち、研修プログラムの目的は達成できたと言える。

4. まとめと今後の課題

本研究では、学校におけるミドルリーダーたる「カリキュラム・コーディネータ」の力量形成に資するe-Learningプログラムの開発を試行した。異なる地域の8名の教師に、電子掲示板やテレビ会議システムを用いてカリキュラム開発の動向を分析したり、事例研究を展開したり

してもらったところ、カリキュラム・コーディネータに必要とされる、多様で複雑な知識を彼らが充実させたことが確認された。

また、筆者らが開発した研修プログラムのデザインの妥当性もある程度保障された。ただし、参加者、ファシリテータともに、テレビ会議システムの利用については、利用経験がある程度積まないと、そのコミュニケーションツールとしての可能性を十分には活かせないことも示唆された。さらに、参加者からは肯定的なコメントが寄せられたものの、ファシリテーションについては、担当者が、その手続きに悩みを抱いていた。今回の研修プログラムでは、コーディネータが、ファシリテータにレポート等を評価する規準を提供したが、それだけでは、ファシリテータ役を果たす際の材料が十分ではなく、彼らの認知的・心理的負担が大きい。研修プログラムの円滑な運用を図るためには、この点も改善すべき課題であることが明らかになった。

なお、筆者らは、参加者が研修プログラムで獲得した知識を実際のカリキュラム開発場面で発揮することができるのか、それがカリキュラム開発における同僚間の共同的意思決定を促進するものになるのかを明らかにすることを通じて、本研修プログラムの実践的有効性をさらに詳しく検討することを計画している。すなわち、参加者の所属校を訪問し、そこでの同僚との共同に関する観察、インタビュー等を手段とする追跡調査を実施する予定である。²

注

1. ここでは、「評価規準」は、今日の学校現場で用いられる場合と同様に、「内容のまとめごとに、目標の達成状態を観察可能な姿として表現したもの」を意味する。「評価基準」はそれをレベル化したものであるが、本研究ではそれらは用意しなかった。
2. 2005年度、2名の参加者を対象として、本研修プログラムの効果を評価するための追跡研究を計画・実施している。具体的には、所属校を訪問し、彼らによる授業を観察すると

ともに、カリキュラムやコーディネーションの実際についてヒアリングを試みている。それについては、稿を改めて報告する。

謝 辞

本研究は、松下教育財団第11回研究開発助成(研究代表者：木原俊行)、平成16年度科学研究費補助金基盤研究(C)(1)：(課題番号：16611005、研究代表者：奈良教育大学・小柳和喜雄)、東京大学大学院・情報学環・ベネッセ先端教育技術学講座beatプロジェクトによる支援を受けた。

参考文献

- 安彦忠彦 (2003) カリキュラム開発で進める学校改革. 明治図書, 東京
- 秋田喜代美 (1998) 実践の創造と同僚関係. 佐伯胖ほか編, 教師像の再構築. 岩波書店, 東京, pp.235-259
- Hargreaves, A. (1994) *Changing Teachers, Changing Times*. London: Cassell
- 木原俊行 (2003) カリキュラム・コーディネータの抱える葛藤のモデル化. 日本教育工学会第19回大会論文集, 167-168
- 木原俊行 (2001) カリキュラム開発における共同的意思決定を通じた教師の授業力量形成. 人文研究 (大阪市立大学文学部紀要), 第53巻第3分冊, 105-114
- 小島弘道 (2003) 教務主任の職務とリーダーシップ. 東洋館出版, 東京